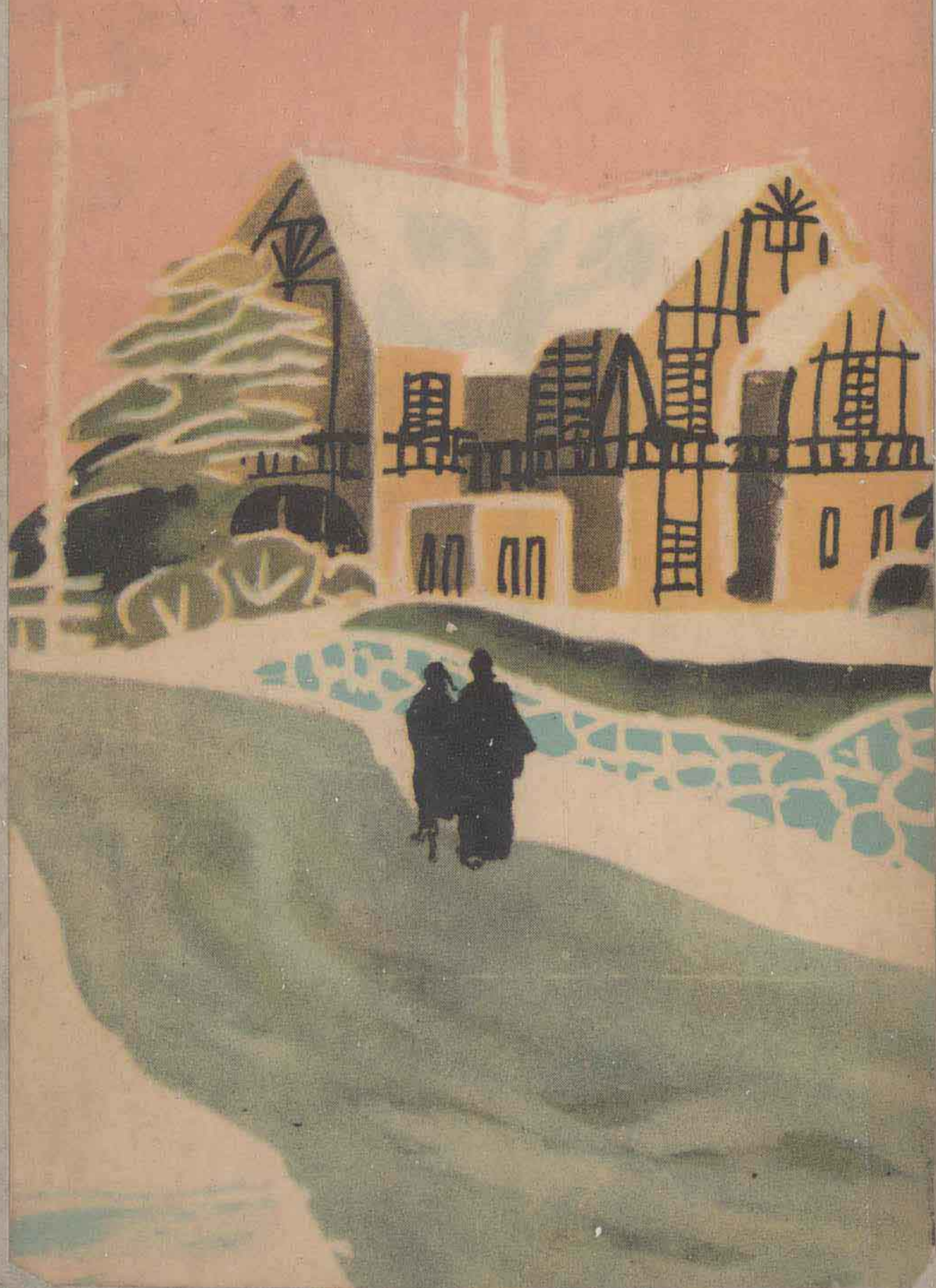


愛

堤 千 代



愛

堤 千 代

東 方 新 書

愛

昭和31年1月5日 刊行

¥ 130

著 者	堤	千	代
刊 行 者	大	野	泰
整 版 者	磯	貝	兌

東京都文京区大塚坂下町57

発 行 所 東 方 社

電話(94)1873・7036
振替口座東京57774

乱丁・落丁の場合はお取替をいたします

印刷・邦文堂

愛 親 子

目 次

.....		
201	167	9

愛

雪の夜

れん子

戦災の都に初雪がきた。焼け残った一条のこの路地のぬかるみが、夜目に、うつすりと白むほど積もり出した。

れん子は傘もなしに、並びの軒の下を拾いながら、かた／＼と溝板を鳴らして帰ってきた。湯上りのほてった肌に、はらはらとくる粉雪の湿りが、楽しいようで、二十一のれん子の体は、きつちりとえりを合わせた、さすがに垢づかない糸織の着物と、そろいの羽織の下で十分ぽかっていた。家のそばまでくると、茶の間の窓に、ぽつと、男の影が映っている。

「あゝ、来てるわ……」と、思うと、こうし戸に手をかけるれん子の胸は、湯上りのほてりといつしよに、かつと熱ばんだ。

「たゞいま」と、はね散らすように下駄をぬぎ捨てると、

「いらつしやつていたのね……」と、湯道具を入れた小さな金だらいを持ったまゝ、男のそばへ駆けよつた。

「ずいぶん、お待ちになつて。すみません。お湯がこんでいたものですから」と息をはずませた

ようにして、ひたと男によせた女の頬は艶々と紅く照つて、肌にとけた、クリームの香と共に、ぶんと男の鼻をうつた。

「いゝや」と、身を打ちこんだような女の声に答えるには、ひどく軽すぎるほどの調子で、男は首を振り、「なんだ、髪に雪がついてるぜ」と、指ではらつてやる。男は二十三か四、多くて六とは、とつていまいと思われる。論なく闇物、それもそこの露店ではなく、横浜の南京町あたりの飛びきり上物らしい背広のズボンを、惜し気もなく、あぐらをかいているが、立つたら、背丈は七寸以上であらう。ちよつと満員電車の二三台には、見あたらず美貌の青年である。

たゞ、長く切れた二重瞼の大きく澄みとおつた目の底に、玉を沈めたような黒瞳に一種の光があつて、引きしまつた艶のいゝ唇の端や、秀でた眉の間から、生えぎわのいゝ額を見事に抜いた、高い鼻のあたりに、薄い影がひそまつているのが、単なる美貌の甘さの艶消しにかけたような印象の曇りになつている。

「だつて、どんぐり降つていゝんですもの」と、女は雪の雫をふくんだ髪をつけるようにして、男の肩にもたれて、甘える横目を男の顔に使つた。

「初雪ね……雪が降ると、私ブルーシカ島のことを思い出すわ……」

女の声は、共通の過去の追憶に、相手をさそつて、ともに懐旧の情に心をひたそうとする感傷にみちていた。

「ねえ、あんた。思い出さなくて」と、女は男の手を膝にとつて、もてあそびながら、肩に頭をつけたまゝ聞く。

「思い出さないね……」と、言つた男の目には急にじれた鋭い光が出た。

「思い出しても、出さないようにしてるんだ」と、にが／＼しく言いきつた。何か、心の肉にささつているとげを、ゆるがされたような苦痛のある声である。グルーシカ島のことを言い出して、男の機嫌がよかつたためしは、かつてない。路地に、ほの白く積む初雪のけはいに、悲しくも、なつかしい過ぎ去つた日を、消え残る物の音のように思い浮かべながら来た女は、うつかり、それを口に出してしまつたのである。

「あんな残酷な、不愉快な思い出は、まづびらだ。グルーシカ島なんて夢にも見たくないよ。君は、無感覚な女だね……」と、必要以上に、はげしい男の調子に打ち込まれた形で、

「だつて……」と、女はおど／＼して、

「あの島で、私たちは、初めて知り合つたのじやありませんか。あの島には、私の親兄弟も埋まつているし……」と、もう潤いのにじんだ目で見つめながら、

「あなただつて、おにいさんが亡くなつていらつしやるんだし……」

向きを換えて、男の真新しいチョッキにとりつくように手をかけると、

「あんたつたら、このごろ、とてもつめたいのね。今月になつてからは、まるつきり、寄りつい

でもくれないし、たまに来ると、ちよつとしたことで怒りつけて……」と、ゆするようにして、「第一、さつきから、まだ接吻一つ……」してくれもしないで、というのを、熱くほてつた頬といつしよに、男の胸に埋め込んだ。

「怒りつけてるんじやあないよ。おれにも、いろいろと、この間から、持ち上がったことがあつてね」

今夜こそ、切り出すつもりで来た話の糸口にかゝつて、さすがに男には、ためらいがある。こうして、抱いている女の若い、たおやかな熱い体は、いきなり今宵の雪とともに、うち消してしまふには、あまりに、かれの男心に執着を残している。しかし、伊井田絃二には自信があつた。こんどの結婚のために、この女は、いちおうは捨てねばならぬ。しかし結婚後、もう一度、この女を拾いあげる。それは、放した小鳥の足に結んでおいた糸を、手もとへたぐりよせるよりたやすいことだ。

絃二は、かゝえた女の肩越しに、家の中を眺め廻した。引揚船からおりた二人が、焼け残りの路地の奥に、ようやく、このさゝやかな恋の隠れ家を見出して、絃二が、女を住まわせてから、かれこれ、もう一年以上である。

家の中に、乏しく並んでいる世帯道具の一つ一つも、女をつれて闇市をあさつて集めたものだ。時をきめず、通つて来るかれを待ちながら、この小さな茶の間で、かれのために、手縫いの

シャツなどを仕立てていた女は、全然、妻のつもりでいたかもしれない。しかし、

「兄貴のことが出たついでに、言つてしまふがね」と、男は始めた。

その声の中には、何か、女の心を、たちまち凍りあがらせるようなひびきがあつた。女は、ぞつとして、見えぬほどわずかに、うしろへ体を引いた。

「実は、僕は結婚しなけりやあならないかもしれない。いや、結婚しなくつちやあならないんだ」
「結婚ですつて」と、女は、はたかれたハエのように、畳に手をついて目を見はつた。

「結婚ですつて。だれと」

「兄貴の許婚者だつた女だ。兄貴の遺言なんだよ……」

と、絃二は、一瀉千里とおつかぶせて出る。

「兄貴は、グルーシカ島で、臨終の時、僕に、くれぐれもそのことを言い残したんだ。おふくろにも、許婚者にも、遺言状を書いておいたんだ。僕には、自分の代りに、その女と結婚してしあわせにしてやつてくれと言うし、その女には、自分と結婚するつもりで、弟と結婚してくれ、それが最後の頼みだという意味を、書き残したんだ。おふくろにも、同じ意味の遺言だつたら……僕は、周囲の事情はもちろん死んだ兄貴への義理にもどうしても、この結婚から免れられないんだ……」

「あんたのおにいさんの許婚者ですつて」

茫然としていたれん子は、不意に、目が覚めたように叫んだ。

「あの、笠原さんのお嬢さんね。あの千万長者の笠原さんの、お嬢さんね……」

「千万長者なんて、もう、財産税と封鎖の中に没落してしまった階級だよ」と、男はさえぎつた。

「そんなことは、問題じゃあない……」

「いゝえ、いゝえ」と、女は、はげしく首を振り、全身で男につきかけてきた。

「あんたが、にいさんの遺言を聞いたのは、もちろんグルーシカ島でだったのでしょう。それじや、あんたは、グルーシカ島から船に乗る時から、もう、その結婚のことはわかつていたはずね。それなのに、あんたは、それなのに」と、女は男の膝の上で、もだえた。

「あんたは、私をだまして、あれから、ずっと今日まで、だまして通してきたのね」

「そうじゃない。そうじゃない」と、男は、あまりに高くほとばしる女の叫びを、手のひらで、ふさぐようにして、しつかりと、女の体を抱いた。

「君に会つて、そのことを忘れて、夢中になつてしまうほど、君を愛してしまつたのだ。今日は告白しよう、あすは打ち明けよう、と思ひながら、つい一日々々、君に引かれて、せつぱつまつた今まで、暮らしてきてしまつたのだ」

「うそ。うそ……だましたんだ。だましたんです……」と、女は、男の腕の中で、かきむしるよ

うにして身をもんだ。

情痴の炎の明滅するせまい部屋の窓外に、さらさらと、雪が風に乗つて鳴る……

留 女 子

雪は高い石塀に沿つて、ヒマラヤスギの植えこみにかこまれた、接收されないのが不思議なくらいの大邸宅のかまえを白くぼかしていた。

広い芝生のひろがりに向かつて、突き出している石造りの露台へ出る一枚のガラスの戸にもたれて、宵の雪を眺めているのは、この笠原家の令嬢の留女子であつた。

年に合わせて、じみなお召しのふだん着に、羽織下に友禪のちりめんの帯を軽く結んで、臙脂に、白くツバキの花を抜いた羽織を着た留女子は、簡単にえりもとにまとめた髪に差した、ワスレナグサの造花の薄紅にうつつて、褪せるかと思うほど白く沈んだ面持で、すらりと、ガラス戸のいぶし銀のふちに手をかけて、雪の降るのを眺めている。

雪は盛に降る。露台の白い大理石の手すりも、石か雪かわからぬようになつた。ガラス戸越しに、室内から差す光が、露台の雪の上に、ほつそりと、留女子の影をうつしている。

「おとし、グルーシカ島から、初雪の便りがきたことがあつた……」今年の初雪を眺めている留女子の心には、一昨年前の、遠い北海の孤島の初雪の便りがしのばれている。かの女の恋人、

婚約の伊井田延行は、その孤島の守備の明け暮れから、一つ／＼に熱い心をこめた便りをよせてきたが、その最後に近い一通に、

「けさ、この島に初雪がきました。とてもスゞメの三里までくらいな、なまやさしいものではありません。しかし、やはり初雪です。いつか渋谷の邸の一室で、あなたのピアノを聞いた初雪の日を思い出しています……」と言つた一節があつたのを思う。

過ぎ去つた年の雪は、消えうせて残らぬように、便りを書いたその人は、もうこの世にはおらぬ。その人を見る日のないことはむかしの日の雪が再び地に帰らぬのと同じである……留女子の頬を、いつか涙が濡らしていた。彼女はガラス戸の前から歩みを移して机の方へ行つた。

薄いオレンジ色のデシンをちぎませた笠を着せたフロアスタンドの光は、やわらかに、このぜいたくに限つた室内を照らしている。

机の上の象牙縁の写真立ての中には、一人の青年の半身像が、そのやわらげられた光を浴びていた。写真の中から、その健康で善良な人柄がただよい出ているような、明かるい、すなおな微笑の顔である。

「延行さん……」と、留女子は、その笑顔を見つめて心に呼んだ。

「どうして、あなたは、死んでおしまいになつたの……」その上、あんな遺言なんか……それと思うと、留女子の心には今さらに、ものうらめしい悲しみがせまつてくる。

「でも、もういゝわ、これでいゝわ」と、かの女は、億万べんの思いかえしのあとにきて、今はようやく、心になれた哀傷のきわまるはてのおちつきを、無言のきゝやきで写真の中へ告げる……
「どうせ、私は、あなたが死んだのと同時に、自分も死んでしまつたのですわ。私の今までの生涯は、私の見知らない、グルーシカ島の雪のそこに、あなたといつしようにうずまつているのですものね……」

やるせない嘆きをそぐ、写真の主は、たゞいたずらに笑顔である。

「今の私は、たゞ、私という女の姿と形ばかり残つているのですわ。その女の姿と形をあなたの遺言どおりにまかせて、やがて、白無垢と角かくしに包む日がきても……それは魂のぬけた空蟬のからが装うだけ……」

あまりにも早く、生涯の恋を失つた自分という女のもろい弱い運命を、みずから慟む思いに留女子は、泣きぬれてしまう……

「留女子さん、おや、ストーブに火もつけないで。寒いでしょうが……」と入つてきたのは、見るからに、いなかくした老女である。近い中に、せがれの嫁となるこの令嬢に、その名を呼びかけるのさえ、どこか、遠慮そうな風であつた。

「絃二は、おそいのですのい……」と、おずく、寄つてきながら、お重は言つた。

「今夜は重役会議で、おそくなると、おつしやつていらつしやいましたわ」

と、留女子は、涙をまぎらしながら、やさしくほゝえんだ。亡き恋人の母……人一倍、孝心な子であつた恋人が、ひたすらに、その老後を気づかつていた母である。

空蟬の結婚を、かの女が引き受けたのも、亡き人の遺言のうちに、その心づかいをくんだのがその主な情であつた。

「重役会議へ、へえ」と、お重は、聞きなれない言葉に感じ入つた声を出す。絃二は、もうすでに、笠原家の事業上に、主な位置を占めているのである。

「おかあさま、お茶でもおいれしましょうか」と、留女子は石造りのストープに、スイッチを入れてから、ベルを鳴らした。すぐに、はいつてきた女中が、言いつけられた銀のティーセットに、インドリングを盛つた鉢を、そこへ運んでくる。

「よく降りますのい。絃二も、早く帰ればいゝに……」と、母はなれぬ風で、いすにかけて、首を延ばして窓外をのぞく。

「どうぞ、おひとつ、おあがりあそばして」と、留女子は、香の高い熱いのみものと、雪の夜にさわやかに青い、くだもののきれを母に給仕してすゝめる。

「まあ、甘いお茶ですのい」と、母は一すゝりすゝつて、

「もつたいたない。こんなもの、今どき世間にはありませんぞい。一日中、こんな結構なものをいたゞいて……」と、なにやら、心にたまっていることをもらすように言い出す。

「これは、買いおきでございますのよ」と、留女子は母の言おうとしていることが、たいてい、わかつていたので、砂糖の方へかたづけようとしたが、

「重役会議なんて、絃二に、勤まりましようかのい」と、むきになつて始める。

白と金で、ルイカンズ式に豪華にかざつた室内を見まわしながら、「私は、いつもく、絃二に言つてきかせていますのぞい。お前が、あんな、りっぱなお嬢さまをいたゞいて……」

と、母は、卓一つへだてて向かい合う留女子の姿を、しよぼく／＼と目ばたきして眺めて、

「重いお役について、この結構なお邸に、母親まで引きとつて住まわしていただけるといふのは、みな兄さんのおかげだぞい。にいさんにさずかつていた果報を、お前にゆずられたおかげだぞい。かならずく、にいさんになり代つて勤めることを忘れんように、と言いきかしていますのぞい」と、母の目は、机の上の写真立ての中の顔へ、移つて行つた。

「兄と違つて、絃二には、どうも小さいときから、わがまゝなところがありましたのい。それが気がかりで……」

「延行さんは、ほんとうに、ちがつていらしましたわ……」と、この時だけ留女子は、氣のこもつた声で合わせた。かの女は、さつきからのような母の言葉を、いくたびも聞いて、そのたびに、心が痛むのを覚える。母の言うのを聞いていると、なき人の遺言が、母と弟の上ばかりに思いはかられていて、留女子自身の女心へのいたわりが、うすめられている感じを出してくるから

である。

「えゝ、もう、それは兄弟とも思えんほどですぞい。延行の方は、五つでも多く父親についてただけ、しつかりと育つたのでしようぞい。絃二の方は、あんまり早く男親に別れて、至らん私の女手一つで、甘やかしすぎたせいでしようのい……」と、老母は、あの世と、この世のわが子の上を、ものなつかしく語つて、

「顔も、ちがつておりましょうか……」

「えゝ、まるつきり……」と、留女子もながめる。写真立ての中の、ありし日のまゝの笑顔に寄つた二人の老若の女の目は、ふと、うるむ。

「新聞やラジオでは、よく生きている英霊と言うことを聞きますけどのい。延行は、現在の弟が臨終を見たのじやけに、心迷いもない代りに万に一つというたのみも、のうてのい……」と、母は、うす青い、リンゴのきれを銀の果物さしにさして見ながら、ひそ／＼と言いつづける。

「どうぞ、まあ、絃二が、りつぱに兄の代りを勤めてくれゝば、私も、あんたに安気ですけどのい……」

「おかあさま、私には延行さんの代りはありませんわ」と言うさけびを、じつと心にひきしめて、うつむいて長い睫に帯びた影を、青いほど白い滑らかな頬に伏せている留女子の心は、ずいぶん切ない……そのうら若い、しみ／＼と黙している形を、いつか、外の夜の雪のけはいが、ひそや